

乳癌様の組織像を伴った卵巣漿液性腺癌の一例

放射線科 三森 天人、小柳 由季、富田 晃司、武本 充広
 松原伸一郎
 産婦人科 小高 晃嗣、水谷 靖司

Key words：卵巣腫瘍、MRI、乳癌

はじめに

卵巣腫瘍には様々な組織像が存在するが、今回我々は卵巣腫瘍の一部に乳癌様の組織像を呈する部位を伴った症例を経験し、画像と病理組織像との対比を行ったので報告する。

症 例

30歳代、女性

主 訴：腹部膨満感、排便障害

既往歴：特記事項なし

妊娠・分娩歴：なし

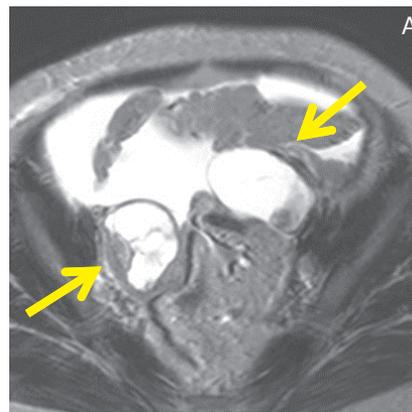
現病歴：腹部膨満感と排便障害を主訴に近医を受診し、腹部超音波検査にて腹水と骨盤内腫瘍を指摘され、精査加療目的にて当院産婦人科に紹介となる。

検査所見：CA125が4226U/mlと著明に上昇。CA19-9は48U/mlと軽度上昇。CEAは正常範囲内。

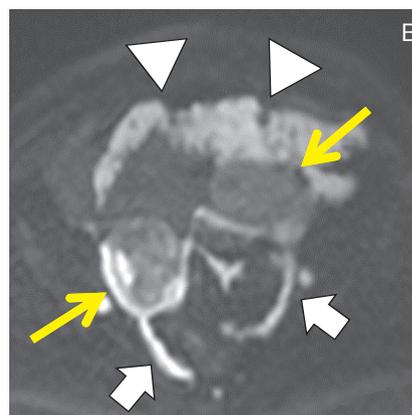
画像所見

骨盤部MRI（化学療法前）（図1）：多量の腹水と両側卵巣に嚢胞性腫瘍がみられ、また、右卵巣の嚢胞性腫瘍には壁の肥厚～充実部分と思われる部位が認められた。骨盤内には腹膜播種と思われる病変が広範にみられ、大網ケーキと思われる大きな腫瘍様の構造も認められた。ダグラス窩の播種病巣の生検にて腺癌と診断され、特に漿液性腺癌が疑われた。卵巣の漿液性腺癌およびその広範な腹膜播種と診断され、化学療法が施行された。

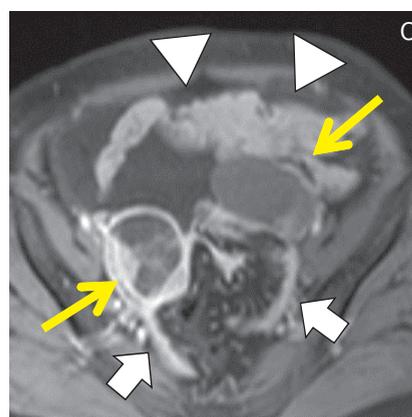
図1 骨盤部MRI（化学療法前）



A T2強調像



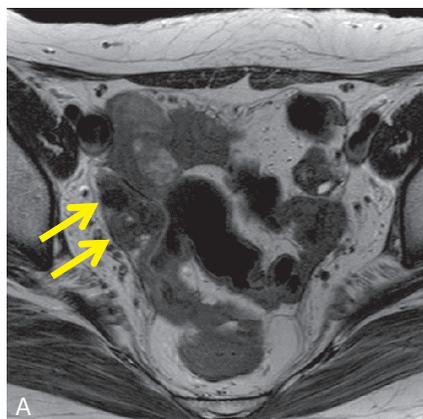
B 拡散強調像



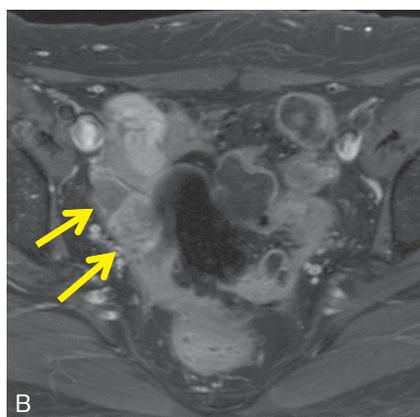
C 脂肪抑制造影T1強調像

両側の卵巣に嚢胞性病変がみられ (→)、右側の卵巣では壁肥厚～充実部分様の構造が認められる。腹膜の肥厚や腹膜に沿った結節様の構造がみられ (⇒)、播種を反映していると考えられた。骨盤内前方よりでは大網の大きな腫瘍が認められる (▲)。多量の腹水も認められる。

図2 骨盤部MRI (化学療法後)



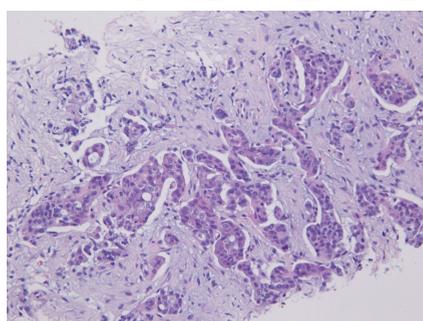
A T2強調像



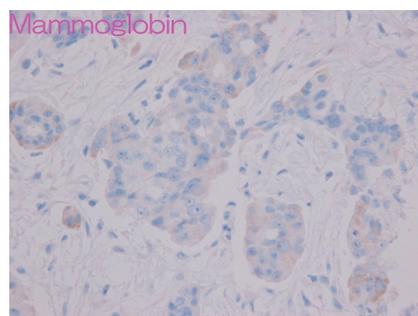
B 脂肪抑制造影T1強調像

腹水は著明に縮小し、卵巣もほぼ正常大となっている。右卵巣にはT2強調像ではやや低信号の2個の小さな結節様の構造が認められる (→)。腹膜や大網の病変も著明に縮小している。

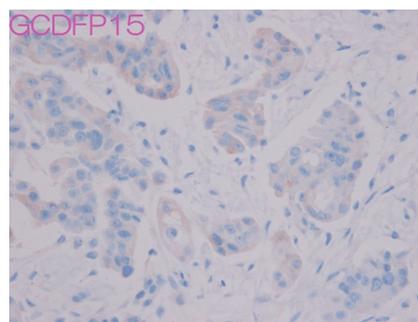
図3 ダグラス窩の播種病巣の生検の病理組織像



A T2強調像



B



C

B、Cは免疫染色

腹膜の生検による組織像では腺癌、特に漿液性腺癌の可能性が考えられた。MammoglobinおよびGCDFP-15は陰性と考えられた。

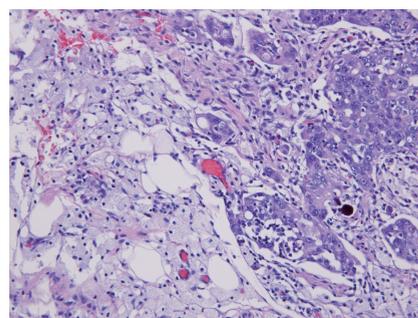


図4 手術で摘出された大網の病理組織像 (HE染色) 腹膜の生検による組織像と同様にこちらの病変も漿液性腺癌と考えられた。

骨盤部MRI (化学療法後) (図2) : 両側の卵巣の嚢胞性腫瘍は著明に縮小し、ほぼ正常な大きさとなっていたが、右卵巣には小さな低信号の結節様の構造が2個認められた。また、播種病巣や大網ケーキも著明に縮小または消失していた。その後手術が施行され両側の付属器、子宮、大網などが摘出された。

病理所見

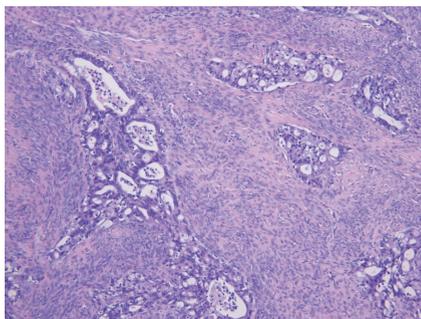
化学療法前 (図3) : ダグラス窩の病変の生検の組織像は漿液性腺癌が疑われた。

手術後（図4、5）：大網の残存腫瘍は漿液性腺癌が疑われたが、右卵巣に残存する小さな結節の一つは線維腫であり、もう一つは免疫染色の結果もあわせ乳癌に類似した組織像と考えられた。

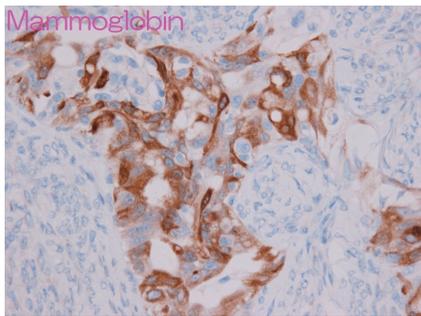
図5 手術で摘出された右卵巣の病理組織像



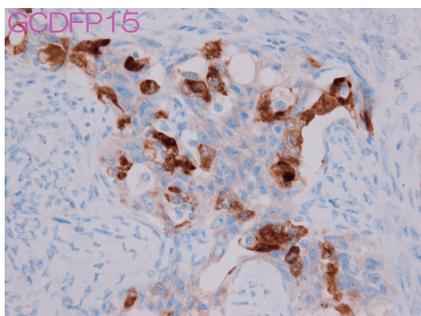
A 摘出標本



B HE染色



C



D

C、Dは免疫染色

右卵巣に2個の結節様の構造がみられ（→）、上部の結節は線維腫で、下部の結節では乳癌の組織像が考えられた。MammoglobinおよびGCDFP-15は陽性と考えられた。

考察

化学療法前に広がっていた卵巣の腫瘍や腹膜播種などの病変は漿液性腺癌が主体と考えられたが、右卵巣に存在する乳癌に類似した組織像に関して、同一卵巣に乳癌の転移と漿液性腺癌が併存していたのか、いずれの組織像も卵巣由来で特異な分化によって乳癌様の組織が生じたものかが議論となった。免疫染色の結果からも乳癌様の組織と生検時の組織および腹膜の腫瘍の組織は異なる病変と考えられた（表1）。

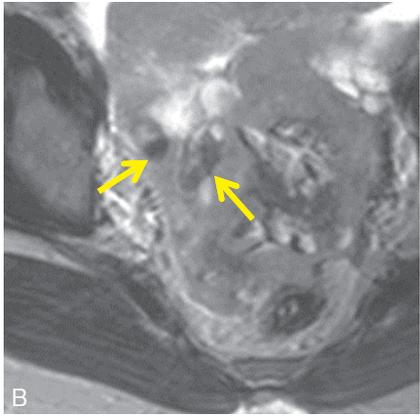
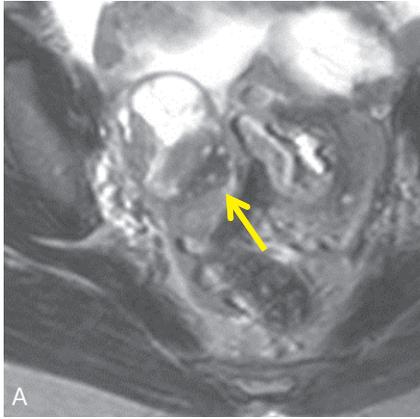
その後乳腺外科を受診したが、乳腺には腫瘍などの病変は認められなかった。術前に化学療法が施行されていたため、存在していた乳腺の腫瘍が化学療法によって消失した可能性が考えられたが、化学療法前後のMRIの画像を詳細に比較検討してみると、乳癌の組織様の部分と考えられる結節様の部位は化学療法前の画像でも認められ（図6）、化学療法の前後で大きさや信号パターンなどに変化はなく、この部位は化学療法による縮小効果などはみられなかった。その点からは乳腺に腫瘍が存在していたとすれば、その乳腺の腫瘍も消失せずに残存している可能性が高いと考えられ、乳腺腫瘍が化学療法によって消失した可能性は低いと考えられた。また、化学療法前のMRIの画像でも右卵巣に乳癌様の組織の部分が認められた点からは、化学療法による影響での特異な分化による乳癌様の組織の出現も考え難い。卵巣に漿液性腺癌が存在し、化学療法前の段階ですでに特異な分化による乳癌様の組織がその一部に出現した可能性は考えられるが、結論には至っていない。

表1 卵巣癌と乳癌における免疫染色の陽性率の比較

	PAX8	WT1	GCDFP-15	Mammoglobin	
卵巣癌	漿液腺癌	96.4	86.9	0	3
	類内膜腺癌	88.9	27.8	0	39(子宮)
	淡明細胞腺癌	100	0	0	
	粘液腺癌	8.3	0	0	
乳癌	導管癌	0	2.8	84(meta:60)	55
	小葉癌	0	0	90(meta:52)	

生検時	陽性	陽性	陰性	陰性
切除(腹膜)	陽性	陽性	一部陽性	陰性
切除(右卵巣)	陰性	陰性	陽性	陽性

図6 骨盤部MRI (化学療法前)



A, Bともに T2強調像
化学療法後の画像でみられた右卵巣の2個のやや低信号の結節は化学療法前の画像でも右卵巣の腫瘍の一部に認められ (→)、化学療法前後の画像を比較しても大きさや信号パターンにほとんど変化はみられていない。